

いつも一緒 富山のペットたち

肥満は、取り入れたエネルギーと使ったエネルギーのアンバランスによって起こります。犬や猫は、一般的に適正体重を15%以上超えると肥満といわれます。

犬も猫も、1歳くらいでほぼ大人になり、この時期の体重がその個体の標準体重に近いとされています。



坪島 久也

坪島獣医科病院長
(富山市大泉北町)

減量の目安として、1歳ごろの体重を適正体重に設定して評価するとよいでしょう。

普段の食事以外にも、ついついおやつを与えてしまうという飼い主さんは多いはず。おやつが肥満の原因になっているケースは、かなりたくさんあるのではないのでしょうか。

ただ、飼い主さんの中には、ペットの肥満を肥満と認識していなかったり、太っていることは分かっても「ちょっと太めの犬や猫の方がかわいい」「くらいにしか捉えていなかったりする場合も多いようです。しかし、実はさまざまな病気を誘発したり、病気の症状を悪化させたりする要因になっていきます。

肥満にどう対処？

心臓に負担

まずは、心疾患などの循環障害が挙げられます。肥満の体の全体に血液を送るため、心臓に負担がかかるのです。体重が増えたことで関節に負担がかかり、関節障害を引き起こすこともあります。

糖尿病の原因となったり、糖尿病を悪化させる原因になったりすることもあります。また、皮膚の免疫力が低下し、皮

膚疾患にかかりやすくなります。手術時のリスクも大きくなります。麻酔薬が脂肪組織に一時的に吸収されるので、薬の効き方が悪くなり、多量に必要な薬剤になります。さらに、麻酔薬から覚めづらくなり、体に負担がかかって危険性が高くなります。脂肪組織があるために広く切開しなければならなかったり、術後の傷の治りが遅くなったりする

最後は繁殖障害です。排卵異常や精子の形成不良などで、繁殖力が低下してしまいます。

絶食は駄目

肥満の治療には、運動療法と食事療法があります。運動療法は推奨するのが難しいため、取り入れるカロリーを食事療法で減らすことが中心となります。

体重を減らすには、短時間の厳しい食事制限より、低カロリー

でも必要な栄養素が全て取れるように、バランスのいい処方食でゆっくり進めていく方がよいでしょう。重要なのは、体の「余分な脂肪」だけを減らして「健康的」に減量することです。

通常の食事を減らすだけでは、筋肉や内臓、骨を維持するためのタンパク質やビタミン、ミネラルなどが不足しがちになります。その点、減量用の処方食は、必要な栄養素を減らさず

に、カロリーを抑えることができるように作られています。

また猫の場合には特に、急激な食事制限をするとう、全身の脂肪

が肝臓に集まる肝リピドーシスという病気になってしまう危険性があります。絶食をしてはいけません。

食事療法では、動物におやつをやらず、1日1、2回の適切な量の食事にゆつくりなれさせる方法もよく行われています。

ペットの減量を成功させるには、家族全員がその必要性を認識していなければなりません。食事の管理を始める前に全員の同意が必要です。減量に一人でも反対だと、計画は簡単に失敗します。

処方食で減量しよう

減量するときは、体調を崩す、必要な栄養素が摂取できないといったトラブルが起こらないように気を付けましょう。獣医師と相談しながら、肥満に対して無理のない減量計画を立てていく必要があります。

「いつも一緒 富山のペットたち」は、毎月第1木曜日に掲載します。



体重の重みで床擦れを起こし、前脚の毛が抜けた犬



適正値の約2倍に当たる体重10kgの猫。おなかに脂肪が付いている

2014(平成26)年10月2日
北日本新聞